

1例が見られた。I抗体価及びICA、抗甲状腺マイクロゾーム抗体等自己抗体の複在と、血糖コントロール及び網膜症等合併症との間に明確な相関が見られないが、I抗体の上昇及び低下時に低血糖頻発の傾向があり、コントロール困難となる。更に詳細な把握と治療の検討が必要と思われる。

3) Werner 症候群の兄妹例

黒田 毅・高山 昌史 (県立坂町病院)
 渡辺 悟志・浅野 良三 (内科)
 野沢 幸男
 八幡 和明 (厚生連中央総合
 病院内科)

症例1：46歳男。主訴は発熱、右踵部痛。生下時より、身体發育やや不良。昭和53年内障を、59年糖尿病、強直性脊椎炎を指摘された。現病歴：平成元年10月11日、右踵部の疼痛と悪寒にて入院。右踵部に皮膚潰瘍を認め、老人様顔貌、白内障、腰部の強直および脊椎の可動制限を認めた。糖負荷試験でインスリン抵抗性を認めた。X-P 上アキレス腱等に異所性石灰化を多数認め、椎体の癒合、仙腸関節の浸食像、硬化像を認めた。HLA B27が存在した。

症例2：41歳女。症例1の妹。糖尿病にて加療中。兄と同様老人様顔貌を呈する。異所性の石灰化を認めるが、椎体の癒合や可動制限を認めない。Werner 症候群と強直性脊椎炎の合併例の報告は認められず貴重な症例と考え報告する。

4) 糖尿病性腎症への低蛋白食の効果について

堀 由夏・佐藤 幸示
 筒井 一哉・佐藤 正之 (県立がんセンター)
 丸山 佳重 (新潟病院内科)
 北沢美智子・牧野 令子
 阿部 巴・入沢セツ子
 風間 芳男 (同 給食科)

近年蛋白負荷が腎糸球体内圧の上昇をもたらす腎障害が進行するとの考えから、糖尿病性腎症に対する蛋白制限の早期導入が注目されている。今回平均罹患期間12年、平均年齢58.5歳のNIDDMの腎症の4症例(内ネフローゼ症候群3例)に低蛋白食を投与し短期的効果につき検討した。4例ともBUN, Cre 価の上昇は軽度だが、Ccr 35-55ml/minと低下していた。平均31.8日と短期間ではあったが、糖尿病食に加え0.70-0.8g/kg/dayの低蛋白食を開始し、尿蛋白は4例中3例で低蛋白食開始前の平均7.2g/日から退院前4.5g/日と、減少を認めた。更にこの内2例と他の1例にTPの平均13%の増加、Albの平均18%の増加を認め、理学的にも浮腫

の消失を見た。一方4例中2例にTG, UAの増加を認め、今後の留意点と考えられた。嗜好、献立の問題は栄養士の方々の尽力にて良好な摂取率を得たが、今後は蛋白窒素代謝、貧血、あるいは家庭での継続の問題等、長期的効果を検討する必要がある。

5) 糖尿病教育入院の効果

—一年間の治療成績—

金子 兼三・保坂 秀子
 黒井 俊子・斉藤 明美
 田中 憲子 (長岡赤十字病院)
 はか看護婦一同 (内科)

6) 利用者からみたレストランの糖尿病食の問題点

岩原由美子 (信楽園病院栄養科)
 高沢 哲也・山田 幸男 (同 内科)

〈目的〉最近我々が育成したレストランの糖尿病食(以下「糖尿病食」)の問題点を、レストラン及び利用者側から検討した。〈方法〉「糖尿病食」の内容：指示エネルギーは、18, 20, 23, 25単位とし、副菜は同じで主食でエネルギー量を調節した。すべての食品は計量し、塩分は3.5g以下、メニューは5種類である。レストラン側とは検討会で、利用者はアンケート調査(71名)により検討した。

〈結果・考按〉レストラン側の問題点：①糖尿病食に対する知識不足と作業工程でのまちがいが、②塩分制限による味の低下、③制限食による見た目の貧弱さ、などで、対策として、レストラン・病院の合同勉強会の開催、調理マニュアルや配膳時のチェック表の作成、だしの使用、食器や盛付で色豊かにする、などではほぼ解決された。利用者のアンケート調査：「糖尿病食」の味と量、バランスは利用者のほぼ7割が良好と答え、糖尿病食として、75%の利用者が満足していた。

7) 柏崎市住民本検診における糖尿病スクリーニング

涌井 一郎・五十川正矩
 田村 孝・会田 恵 (柏崎市刈羽郡医師会)
 小黒 元夫・宮川 糧平 (糖尿病委員会)
 阿部 常一 (柏崎市刈羽郡医師会)
 吉田ふさ子・古川 久子 (柏崎市役所保健衛生課保健婦)

平成元年度柏崎市基本健康調査総受診者数15592名のうち「尿糖陽性」または「糖尿病の既往のある者」は901名(5.8%)。570名に75g OGTTを施行し糖尿病型

72名 (13%), 境界型 400名 (70%), 正常型 98名 (17%). 肥満度と各型の割合との間に有意な相関関係はなかった. 随時血糖, HbA_{1c}, HbA_{1c} の各値又はそのくみあわせにより判定区分の型別のスクリーニングしうる基準値を設定することはいずれも困難であった.

肥満度+30%以上の肥満群と肥満度±10%以内の対照群との間で, 随時血糖, HbA_{1c}, HbA_{1c} いずれも肥満群の方が高値であったが, HbA_{1c}, HbA_{1c} 高値の割合で見ると肥満群で特に多いということはなく肥満という単独因子のみではスクリーニングの対象とするには困難と思われた.

8) Novopen システムの臨床使用例

八幡 和明・鈴木 丈吉 (長岡中央総合病院 内科)

当院での応用例は, ノボペンが3例, ノボペンIIが15例, IとIIの併用が1例, Iと従来注射器の併用が4例で計23例. 使用インスリンはR 4例, 30R 18例, Nが1例. 症例の年齢は10才~68才で, IDDMとNIDDMがほぼ同数. 視力障害者は5例. 操作は簡単で若い患者には外来導入も可能であった. インスリン治療(1回注射9例, 2回注射5例, 混合注射1例)からの変更が15例であった. ペンの注射回数はNIDDMでは1~2回, IDDMでは3回の注射を必要とするものが多かった. ペン使用前後の各々6ヶ月の平均のHbA_{1c}では, 9.74±2.20%から8.24±1.18%と有意に改善した. 適応としては頻回注射例, 混合注射例, ブリットル型糖尿病例などで, 高度視力障害例や高齢者には導入は困難であった. トラブルとしては針先からインスリン液がでないというクレームが2件あったが, 組立の際の不手際によるものであり, 組立手技の確認を繰り返し実施することが重要と考えられた.

9) 糖尿病コントロールにおける心理的要因の検討

横山 知行・津田 昌子
矢田 省吾・浜 齊 (木戸病院内科)
谷 長行 (新潟大学第一内科)

糖尿病のコントロール良好群と不良群の心理的な相違を検討することを目的に, 木戸病院糖尿病外来を1988年3月, 4月に受診した患者にEPPS心理検査を施行し, その後18カ月間のコントロールの状態をHbA_{1c}を指標にfollow-upした. 対象症例は75例(良好群35例, 不良群40例)で, 両群の性別, 年齢の背景因子に有意差はなかった.

良好群, 不良群全体の比較では“自律”と“変化”のスコアがそれぞれ5%と1%の有意差を以て不良群のほうが高かった. このことからコントロール不良群は良好群に比して同じことを続けるよりは変化を好み, 他人の言うことを素直に聞くよりは自分勝手に物事をすすめていく傾向があることがうかがえた. また, 当初コントロール良好であったものがそのまま保たれた群と, 不良群に移行した群との比較では, “親和”“他者認知”のスコアで1%の有意差を以て良好持続群が高く, “攻撃”“持続”で不良移行群が5%の有意差を以て高かった. このことからコントロール良好持続群は内省的で, 他人に対して親密でありたいと思うことからその意見立場を尊重する傾向が, また不良移行群では衝動的で他罰的であることがうかがえた.

症例検討

急性増悪した糖尿病性網膜症の1例

清水マチ子 (舟江病院内科)
安藤 伸朗 (新潟大学眼科)

特別講演

『糖尿病と内分泌疾患』

金沢大学第二内科教授

竹田 亮 祐 先生